青髭１８

明宏訊

逆光は物体に神秘性を添えることがある、なんら実態がなかったとしてもだ。ギュスターブ・ペリゴールがやけに神々しく見えた。まるで、古い書物だけの中でしか出会うことができない、古代の賢い長老のようだ。彼の向こう側にはまるで後光のように月が控えている。
　これはたがが光学的な現象にすぎない。
　アンリは、心の中の動揺をなんとか抑える。だが、それは休火山のマグマのように彼の中でなおも燃え盛っている。
　食糧生産が卑しい仕事だという、彼の主張、というよりはこの世界、共通の常識であり、認識だが、それが音を立てて崩れるような気がしてきた。
　そこまで考えて、アンリは不機嫌にならざるをえない。そのようなことが、啓蒙思想家どもが賢しげに主張していることだからだ。だが、ギュスターブの非現実的なまでに神秘的な側面を見せつけられているうちに、同じことを言っていてはいても、まるで違うことを意味しているようにも思えてくる。
　ふいに、自分の立ち位置がわからなくなる。まるで霧でできた大地を歩いているようだ。
　いったい、どこから来て、どこへ行くのか？
　確か、パリ、ヴェルサイユという僻地から、彼の主君である伯爵の気まぐれによって故郷であるギョイエンヌに赴くのだ。
　月が動いて、逆光からずれることによってギュスターブの、馬のような長い奇矯な顔が明らかになるにつれてこれまでの難しい思考がとたんにばからしくなってきた。
「殿、先を急ぎましょう」
「‥‥」
　伯爵はなぜか沈黙を守っていた。古代ミラノの美しい彫像のようにただそこに屹立していたように思えた。彼がそこにいるだけで、もちろん、美しい17歳の少女の外見なわけだが、彼の気まぐれによって元に戻ったりはするが、この鬱蒼とした森が古代ミラノ時代に立ち並んだであろう、瀟洒かつ風流な邸宅の中でトガを着ているような錯覚をおぼえる。それだけ、彼の主君は、恐ろしいままの存在感を有しているわけだ。
　ギュスターブはそれをどう受け取っているのだろうか？訊いてみたくおもったが、貝のように口を閉ざすことにした。どうやら何者か、高次の存在、おそらくは、伯爵のことだろうが違うかもしれない、とにかく、そのような存在によってギュスターブは自身の身の上を知らないことがよしとされている。
　青い血の貴族でありながらその世界から逃亡して赤い血の平民の世界に逃亡していた自分とは歩いてきた道がすこしばかり様相を異にするだろう。もっとも、アンリを使っていた、今からおもえば保護してくれていたとすらおもえる、ブーリエンヌ女伯爵は当初から彼を青い血の持ち主だと扱っていたのだ。知らなかったのは、あまりにも幼かった彼のみである。
　もしかして‥と思う、彼の父も、母も、そして、伯爵すら、そのことを知っていて大人たちは自分をある種の枠にはめ込んだのではないか、アンリがギョイエンヌを逐電したことすら彼らの

想定内にあったのではないか、という危惧である。
　こんなことばかり考えていても何も始まらない。しかし、わが故郷が近づいてくるにつれて先祖の血が騒ぐのか、カルッカソンム城にいたときには考えもしなかった思いに心が侵害されていくのだった。

　ふと、月に見やるとかなり傾いてきる。空が白む予兆だが、それよりもむしろ光り方に心が寄せられる。はっきりとしていた月がぼんやりとしてきた。おそらく、雨雲に覆われつつあるのだろう。もしかしたら、近々、降雨があるかもしれない。
　彼の主君たる伯爵は、あいかわらず光り輝いている。鬱陶しいほどの湿気にいくらかぼやけているが、いや、それゆえに余計に神秘的な空気を醸し出している。アンリがぼっとしているのをいいことに機先を制して向こうから話題を振ってきた。
「従子爵さま、気分でも悪いのですか？」
もちろん、17歳の美少女の外見を装ってのことである。
「は･･･」
「だめですわ、ぼっとなさっては･･･」
　アンリが鬱々としているのに、伯爵は彼をからかって遊んでいる。とても、彼の気分を気遣ってのこととは思えない。
「ここらへんからすでに私にとっては庭みたいなものですから、ご心配はご無用です」
　そっけなく答えてみたが、相手はまったく意に反さないようでさらに畳み掛けてくる。
　いったい、いつまでこのような愚かな芝居を続けるつもりだろうか？まさか、家族に対してもこの格好のままで通すつもりだろうか？いや、まさか、いくら伯爵ほどの貴族とはいえ、複数の青い血の持ち主をそう簡単にだましとおせるとは思えない、無理だとは言わないが、可能だろうが、それは世間に対して不必要なリスクを負うことになる。
　不必要に青い血を発揮すること、換言すれば、不文律の協定とでもいうべきものを破るほど、ばかげた芝居にはエネルギーを必要とするはずなのだ。自然と、それはナルボンヌの干渉を招くことになる。それがいま、ナント王国、いや、エウロペ大陸全域を覆う空気なのだ。いかに伯爵とはいえ、それを無碍にするわけにはいかない。
　そもそも、この芝居にどんな意味があるのか？
　疑問を直截的にぶつけてみたいと思ったが、すぐ後ろにギュスターブがいることを思い出した。
「このままで、我が家を訪れるつもりですか？」
「そうですね、従子爵さまのご実家を訪れるのですから、この格好では･･･失礼に当たりますね･･」
　ギュスターブは、伯爵をどう思っているのだろうか？今の会話から、親戚、という線は彼の頭の中で完全に否定されたにちがいない。
　思い切って話題を変えることにした。
「ギュスターブのような人間は他にもいるのですか？」

「‥‥？従子爵さま？」
　自分の名前が呼ばれたのだから、とうぜん、彼は疑問を抱くだろう。しかし、そんなことは想定済みだ。問題は伯爵がどう反応するか、なのだ。
「木を隠すならば森に、というでしょう。ギュスターブの場合は木のふりをしてもらいました。ここらへんを見てごらんなさい、木がぎょうさん生えていますね」
「ぎょうさん‥‥‥？」
　アンリはその言い回しがわからなかったが、文脈から簡単に推定することができた。それにしても哀れなのはギュスターブである。いったい、何のことだがまったくわからずに目を白黒するばかりだ。